2015年5月2日(土)
図書新聞 第3265号

華麗なる陥穽

消費文化にほかならないモダン・ライフの表象が、どのようにして戦争と結びつき、戦争を鼓舞したのか

今村純子

映画の「制作」と記した際、映画の「製作」と訂正され、「なるほど」と合点した経験がある。歴史上、資本主義と時を同じくして出現した映画は、ある作家の作品として制作されるというよりは、工場で生産される製品のように作られるメディアである。だから「製作」なのだ。本書は、「映画会社は自社専属の男優・女優を抱え、彼らが似たり寄ったりのキャストを構成し、看板スターが各社固有のカラーを印象づけていた」映画の黄金時代にあって、消費文化にほかならないモダン・ライフの表象が、どのようにして戦争と結びつき、戦争を鼓舞したのかを、著者の映画への並々ならぬ情熱によって浮き彫りにしようとする鮮烈な一書である。

モダン・ライフという言葉からまずイメージされるのは、「ひさしの大きな帽子にワンピース、ブラウスにスカートの洋服姿」といったモガファッションに身を包み、銀座の大通りを闊歩する、自立した若い女性たちの艶やかな姿であろう。この「視覚的快楽」は、わたしたちの心を躍動させるに充分であり、一見したところ、心を頑なにさせる醜悪で悲惨な「戦争」とはまったく無縁であるように思われる。それでは、互いに相反するように思われるこの両者はどのようにして共犯関係を結ぶのであろうか。

わたしたちは物理的にのみならず、心情的にも、近くのものははっきり見え、遠くのものはぼんやり見える「遠近法の錯覚」から逃れられない。そしてこの錯覚を際立たせるのが「金銭」であり、さらに言えば、金銭がもたらす「物質的な豊かさの享受」である。

「子どもが小学館の学習雑誌を読み、夫がビールを嗜み、妻が立ち働き向き合所で洋食メニューに挑戦する」といった消費文化モダン・ライフは、まさしく「戦争という「平和の長期建設」がもたらす富と繁栄への強い希求によって、そしてさらにそれが「規範たる西洋・追いつくべき日本・顧慮するに足らない他者アジア」といった上昇志向によって強化され「誰かの死」はおとぎ話のようにリアリティの薄いものとなってしまうのである。この「平和に見える」「社会の様相を著者は、「帝国の民主主義」と名指している。

一九三〇年代を、ありとあらゆる映画表象を通して浮き彫りにする本書において、著者の慧眼は、たとえば、五所平之助監督『伊豆の踊子』(松竹、一九三三年)における、田中絹代扮する主人公・薫の佇まいの背景を彩る「娼妓斡旋親切屋」という風呂屋の脱衣所内の張り紙や、「物乞ひ芸人村に入るべからず」という村境の立て札を見逃さない。「若い女性である薫には温泉町に大看板が目立つ「クラブ白粉」や旅館の座卓上に置かれた「明治」の板チョコのように商品価値がある」という著者のモノに対する鋭い眼差しは、主人公の運命が、一瞬にしてモノと交換可能な、やじろべえのように危うい基盤に立っていることをウィヴィッドに映し出す。

他方で、一女性の個性と資質をもって社会の規範的秩序への抵抗を表現した、溝口健二監督『浪華悲歌』および『祇園の姉妹』(第一映画、一九三六年)が共に検閲を通っているという本書が指摘する事実に驚かされる。「二流市民でしかない女性の異議申し立ては問題視に及ばない」とする検閲の盲点を溝口は見事に逆手にとり、この暗い時代にあって、堂々と抵抗の精神を体現している。このことはいかなる世界の醜悪さによっても精神の自由までは浸食されえないことを証している。

ところで、本書の特徴のひとつに、著者が大都映画社の存在に着目していることが挙げられよう。大都映画は、今日の辛苦を耐え、明日の活力を備える「労働の延長としての娯楽」の役割を果たしていた。それゆえ、都市と農村では「文化資本」の格差が著しい戦前にあって、その格差がそのまま、大手配給会社と大都映画の嗜好へと二分されることになる。『キネマ旬報』でさえも「全国に大都映画しか見ないという熱烈なファン層を築いた大都映画の観客動員力は到底無視できないものだったのである」とする事実は興味深い。

映画界の粗製乱造ぶりは、日本経済の映し鏡ともなっていることを本書は指摘する。「一九三七年(昭和一二)の映画界が関心を寄せた「戦争」は日中戦争ではなかった。台頭する東宝と旧来の勢力松竹の熾烈な抗争こそが注視された」という事実から、個人収入の増加や経済効果がわたしたちにもたらす「遠近法の錯覚」の深度を推し量ることができよう。だがこの遠近の転倒は通常わたしたちの意識には昇らず、むしろそのまったく反対に、善や正義の名の下に、豊かさや華やかさといった個人の物質的な享受の希求こそが、戦争を産み出し、戦争を推進する。このことを本書は全身全霊を挙げて、著者のもっとも情熱を傾ける映画という表象形態を通して、問おうとしているのである。こうして、「本書で取り上げた映画は私が視聴した三〇〇本以上のほんの一部でしかない」と述べる著者によってのみ可能ないわば名人芸を、息を呑むようにして見つめてきた読者ひとりひとりの「歴史的想像力」はいつしかわれ知らず開花し、時の権力と無関係ではない「書かれた」歴史ではなく、「書かれなかった」歴史を十全なイメージのうちに感受することになる。

(美学・表象文化論)

宜野座菜央見著
▼モダン・ライフと戦争
スクリーンなかの女性たち
13・3・1刊 四六判二四〇頁 本体一七〇〇円
吉川弘文館